



誌上 進路指導ケーススタディ この生徒とどう向き合う?

進路にまつわる生徒のさまざまな悩みに、先生方はどのように対処されているでしょうか？
ありがちなケースを取り上げ、実際に先生方に回答していただきました。さらに、日ごろ生徒の悩みと向き合う
スクールカウンセラーの方や、長年高校現場で活躍され現在は会津大学で教育学や教育カウンセリング心理
学を研究されている苅間澤勇人先生にも、ケース対応の極意を伺いました。校内研修などにも、ぜひお役
立てください。

取材・文 / 清水由佳 イラスト / おおさわゆう

ケーススタディ 保護者を交えた三者面談でのケース

No. _____
Date _____

2年生の7月、保護者と生徒との三者面談で。

<やりとり>

教師：先日の進路希望調査では、Aさんは専門学校希望ということでしたが、お家でもそのことは話されていますか？

保護者：えっ？ 大学じゃないの？

生徒：う〜ん、あんまり勉強は好きじゃないし、成績も今一つだから。何か好きなことを見つけて専門学校に行くのもいいかなって。

保護者：何、言っているのよ。専門学校で何かやりたいことがあるの？

生徒：ええ〜、まだよくわからないけど、これからいろいろ調べてみて見つけたいかなと思っていて…。

保護者：何、甘いこと言っているのよ。成績が良くないのは全然勉強していないからでしょ。部活、部活って、いつも帰りは遅いし。そんなんだから、部活は辞めなさいって言っているじゃないの。

生徒：それは、関係ない！

教師：まあ、まあ。確かに今回の模擬試験の結果は少し下がっていましたが、まだ2年生だしね。

保護者：何言っているんですか、先生！ そんなこと言っていたらあつという間に受験ですよ。

今どき、大学くらい行かなくちゃ。先生だって、そう思うでしょ？

↓ この後、どのような対応をしますか？(しましたか?)

● どう対応するか

Blank lined area for writing the response to the case study.

教育カウンセリング心理学の専門家の視点から、ケース対応の極意をアドバイスいただきました。

生徒にも保護者にも キャリア教育を考えていく



会津大学 文化研究センター
上級准教授
荻間澤 勇人 先生

かりまざわ・はやと●1986年岩手大学工学部卒業後、岩手県立公立高校教諭に。早稲田大学大学院教育学研究科後期博士課程単位修得退学。教育学、教育カウンセリング心理学を専門とする。2015年4月より現職。

意見を聞かれる問いかけには
「自己開示+情報提供」を

進路に対する考えの違いで言い合いが始まること、実際にあります。こういう場合、言い合いを何とかしようとする、かえって収拾がつかなくなる可能性があります。とりあえず冷静に、お母さんの投げかけにも、私なら率直に「そうですね」と返しながらも、別の考え方もお伝えすると思います。「先生だったら？」のような問いかけには、まずはウンをつかず答え（自己開示）、とはいえこういう考え方もできませんと伝えること（情報提供）が大事だと思います。

このケースの場合、生徒も保護者も、大学や専門学校に対してステレオタイプな見方をしている様子です。特に生徒は、これまでのキャリア教育で、自分の考えがうまく定まっていなかったり、自分の将来像を考えたための具体的な支援をしていきます。一方で保護者にも、キャリアについて広く考えてもらって、次に狭めるために、例えば夏休みに、親子でオープンキャンパスに行くことなども勧められると思います。そういう意味で、この面談は、「ここからスタートするんだ」という機会と捉えることが大切です。



私なら

こうする！

こうした！

実際に、読者の先生方が
どうされたか・どうされようとするかをお伺いしました。

事前の根回しで 事態を回避

（北海道 匿名希望先生）

保護者と生徒との間で希望に齟齬があることはよくあるので、必ず三者面談の前に、生徒に、保護者に希望を言っているかどうかを面談して確認します。

また、HR時に、保護者と意見の違う人はいないか、このケースのような例を示してそれだけは困ると伝えます。意見が違っていいし、保護者に自分の意見を言っていないならそれでもいいけど、そういう状態の人は必ず教えるようにと指導します。クラスのPTAの会でも、よくあるケースとして話しています。そのおかげか、実際にこのようになったことはありません。

本人の本気度合いを確認

（神奈川県 匿名希望先生）

この面談の中では生徒も保護者もおさまらないので、保護者には「生徒と個人面談を進めていく」ということで、この場合は打ち切っていた方がよいと思います。

その後、生徒本人との面談では「逃げ」で専門学校志望に変えたのなら、必ず後悔すること、保護者も大学への進学を認めてくれているのだ

から、大学進学の条件は本人次第であることを確認します。また、学力が思うように伸びてこないことが専門学校志望と言いつつ原因の場合が多いので、学習方法などのアドバイス等を中心に話を進めていくとよいと思います。

本気で専門学校志望について考えているのであれば、進められる具体的な学校について調べていくように指導します。

生徒の日ごとの 状況によって対応

（神奈川県 匿名希望先生）

生徒が学校での勉強はがんばっているか、集中力がなく無気力になっているかなど、教員の把握している状況によって対応は分かれます。また、文理のコース分けが、2年からののか3年からののかも大きなファクター。今回は、文理分けが3年からのという前提で考えてみました。

〈授業中の勉強はがんばっている場合〉

進路については悩んでいると思うので、この夏休みにしっかり方向性を考えましようという親子に投げかけます。その後は、夏休み中（1週間後くらい）に生徒面談をしたり、夏休み後半にも2学期の取り組み（具体的な学校調べなど）を指導します。

〈学校での取り組みも悪く、前向きな姿勢が見られない場合〉

スクールカウンセラーの視点

このようなケースで、スクールカウンセラーならどう対応されるのか。先生たちとの協力のあり方なども伺いました。



ガイダンスカウンセラー
木村佳穂さん

2005年岩手大学大学院教育学研究科修了後、青森県と栃木県で6年ずつスクールカウンセラーとして勤務。2017年3月まで、早稲田大学教育・総合科学学術院で非常勤講師も務める。

生徒が突然不安定にならないよう 注意も必要だと思います

このようなケースの場合、一般的には担任の先生方がコーディネーターとなって、保護者と生徒が互いに理解を深めていくと思います。高校の進路決定は将来の職業につながる重要な選択だけに、中には保護者も生徒も不安定になる場合もあります。その際は、私たちが担任の先生と相談しながら、精神的な安定や情報の整理などの支援をさせてもらいます。普段から、親子関係で会話の仕方に慣れていない場合もありますので、どうやって話をしているか、会話の仕方の支援を個別に行ったりします。また、進路で悩んでいる場合は、将来のキャリアを考えるための一助として、職業適性検査や性格検査などの心理検査などが役に立つこともあります。それらの実施と客観的なフィードバックを通し、生徒が考えを深めるお手伝いも可能だと思います。

保護者が子どもの進路に口を出す場合、保護者自身が経験を基にした明確な意思をもっていけば、いずれはお互いのギャップも埋めやすくなります。しかし、特に強い意志がないまま漠然と「こんなもんでしょ？」と言われるとき、子どもははむかいたくありません。そこで、保護者の考え方を知らするための事前アンケートなどをとっておくと、このような事態が起こった場合にも、対処の仕方が見えてくると思います。気をつけたいのは、保護者の強い期待に何とか応えようと自分の思いを封じ込めてがんばってしまう真面目な生徒です。そういう生徒が、ある日突然ぶつっと途切れてしまうのが怖い。表情が暗くなったなど日ごろの様子に気が付いて、場合によってはスクールカウンセラーへつなぐなどの必要があると思います。

専門学校に行くことと、大学に行くことの違いについて話し、安易に結論を出さず、よく考えるように促します。学習については、まず全教科をしつかり復習し、自分の好きな科目・分野がどこなのかを模索します。好きな科目があるならばその応用力を伸ばす学習を進め、その延長上に進路を考えていけるよう指導します。

〈対保護者〉

面談後に保護者に残ってもらい、学校での状況と家での状況を確認します。さらに、この時期に大学進学と言っている進路をはっきりできている生徒は多くないことを伝え、専門学校・大学それぞれの存在意義を伝え、前向きな取り組みの重要性を理解してもらいます。

ステレオタイプの考えを 払拭できるように

(群馬 県立西邑楽高校 持齋雅佳先生)



生徒も保護者も、それぞれが大学や専門学校に抱くイメージがステレオタイプに陥っています。そこで、まずは2年生の7月であることを

「活用」することを優先し、①生徒・保護者それぞれに、大学や専門学校の現状の情報収集をしてもらう時間をとる ②4年制専門学校の中には大学院入学資格が得られるものがあるなど、専門学校への新しい認識を確認 ③自分の職業観、学問分野・研究領域に対する興味・関心を基にして、オープンキャンパスに参加する準備(できれば保護者も一緒に)、といった3点を、こちらからは答えを「気に出さず、7月ごろまでに行えるよう指導します。」

ここで学級担任としてどうしても気になるのは、クラス内の他の生徒のことです。もし同様の状況の生徒が他にもいるとなれば、キャリア教育の再構築をしなければなりません。その場合には、同学年の先生方や進路指導部の先生方との情報交換や連携が必要であることは言うまでもありません。

生徒・保護者それぞれに 事実を伝える

(山形 県立霞城学園高校 齋藤昌広先生)



まず、生徒には、「専門学校にするか大学にするかを考えるためには、将来どのような仕事をしたいかということをよく考えてから決めることが大事。その仕事に就くためにはどんな勉強が必要で、どんな資格を取る必要があるかを調べていくと、大学がいいのか、専門学校がいいのかわかってくる。そのことをきちんと調べ考えたうえで、お父さん・お母さんに君の気持ちや伝えれば、わかってもらえると思う」と伝え、保護者には、「いかがですか？お母さん。それから部活のことだけど、こちらも自分で満足できるまで努力を続け、結果が出てから引退しないと勉強にも身が入りません。先輩たちも、部活を最後までやって引退した者は、その後ぐんと成績が上がっています」と伝えます。そして生徒には、「今は、毎日の時間の使い方をきちんと考えて、部活も勉強もするように。2年生というの、そういうことができるようになるための時期だと先生は思っている。その努力を両親に見せることで、君が将来のことを考えているということが伝わるんじゃないのかな」と進めていくと思います。